
Gradually

残像？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gradually

【Nコード】

NO112E

【作者名】

残像？

【あらすじ】

過去を背負い麻雀に明け暮れる男が、周りの人達に感化され、過去を徐々に精算し、前を向いていくみたいな話。筆者の入っていた部活関係上野球がメインです。コメディタッチで描く予定。初作品ですが、お手柔らかにw

｝人物紹介part1｝（前書き）

人物紹介なのらww

初投稿なので、システムがよく理解できないwww

え？馬鹿だなんて？うつせうつせwww

｝人物紹介 part 1｝

｝人物紹介 part 1｝

黒馬 俊

この物語の主人公である。

春からあけぼの学園に通う高校一年生。親を交通事故で亡くし、一人暮らし。特にやりたい事も見つからず、また生活費を稼ぐため、夜は麻雀三昧。身長は170とやや小柄で本人も気にしている。

園城 綾乃

園城財閥のご令嬢。しかし、複雑な家庭事情に巻き込まれている高校一年の女の子。身長は170と女の子にしては高い部類に属す。実は麻雀が得意。

橘 勝也

俊の中学時代の親友。タフメン、ナイスガイ、ムチムチ。身長は185と、巨大。実に羨ましい。

山さん

俊が通う雀荘のマスター。賭博麻雀の仕切りも行っている。麻雀をやらせたら地元では無敗、生ける神とも称される。俊を可愛がる父親的存在でもある。

始まりの日々物語的な意味でw（前書き）

初期設定と読者の方々にキャラ背景を把握してもらいために、コメデイは少なめ、いや皆無でふw

始まりの日々物語的な意味でw

人は一個の有機体である、と学者は言う。つまり、組織体、一緒に作用しある結果をもたらす器官の集合体だと。

すなわち、人は機械と対比することもできる。周囲独立型の時計、周囲適応型の温度計。そのどちらも人は兼ね備えていなければならぬ。もしどちらかでも欠落しているならば、その人は社会的に不適格と見なされる……

俺はこんな科学的な思索にふけっていた。なぜ、記念すべきあけぼの学園の入学式にこんな事をしているか…

それはあまりにも入学式が長すぎるからであつた。

『皆さんの進むべき道は光あふれるものに…』

校長…お願いだからお口をチャックしてくれないか…。埋めるぞ…。

そんな危険思想を抱き俺は突然睡魔に襲われ、気が付くと、式は終わりにかけていた。

自分の教室に戻り、俺はまた一人で今日の過ごし方を考える。

また生活費が足りなくなってきたな…山さんとこいかなきゃ…

教室に入ってから、担任の解散の号令まで、俺に話しかけてくる奴は誰もいない。友達はいない、いや作る必要もない、と俺は考えている。

学校が終わると、家に帰り、着替え、俺はまっすぐに町の裏通りに山さんの経営する雀荘『一発』に向かう。

「ういす」

俺は、煙草をふかしながらテレビを見ている山さんに挨拶した。

「おお！俊坊！今日も稼ぎにきたのか？」

「山さん、人聞きの悪い事言わないでくださいっスよ！で、今日は

どの卓すか？」

「ああ、奥の二卓でやってるぞ。俊、ほどほどにな。」

「わかってますよ。」

俺はてけとーに返事をし、奥に向かった。

その卓にはゴルゴ風サングラスの男と、いかちい男二人がいた。

「ここ、いいすか？」

俺はゴルゴ風サングラスの男に尋ねる。

「別に構わんが、ここは…」

「大丈夫、わかってるから。でレートは？」

ゴルゴは顎の辺りをいじりながらしばらく黙っていた。そして

「そうだな…点5でいくか」

「おっけー了解。じゃあやりました。」

1時間後…

「坊主、強いな…」

「たまたまです」

「俺ら三人で回してる事に気付いてるんだろ…」

「はい」

「それを読んで俺一人を狙いうちとは、相当場数踏んでるな。どうだ？うちの組の代打ちやってみない…」

「興味ありません」

間髪入れずに言っただけだった。度々誘われるんだが、めんどくさそうなので断るようにしているのだ。

「そうか…ほら、負け分だ。」

そう言っただけで、ゴルゴは諭吉を五枚出した。

「どうも、場代は払ってきますんで」

俺はそう言い残し、山さんの所へ行く。

「今日も…どうやら勝ったみたいだな？」

「当然、ほら、場代」

「…毎度。なあ、まだこんな生活続けるつもりか？」

山さんは、真剣な表情で俺に言う。

「高校生にもなったことだし、バイトとかも色々あるだろ？」

俺はこの稼ぎの良い麻雀を捨てるつもりはないし、麻雀をやっている時の気持ちの高ぶりは、俺にとって人生の楽しみなのだ。辞めるわけにはいかない。

「まあ、考えとくわ…」

「そうか…、気をつけろよ。」

「ああ、じゃあまた。」そう言って俺は家に向かう。

もちろん貧乏学生である俺が住む家は、おんぼろアパート。風呂トイレ有りで家賃二万ってんだから、時々、アマゾンでしか見られないような虫が現われる事を除けば、これは優良物件である。

「ああ疲れた疲れたって」

俺はため息をこぼしながら部屋に入る。

「学校…たりいな…。まあでも、しゃあねえか。おやすみなさい」と

俺は裸布団にくるまる。

が、隣りからどうも音がする。壁に何かが当たるような音だ。

「隣りは空き家なはずじゃ…。まあいいや、寝よ。」

こうして入学式の日が終わった。

積み込みの日（前書き）

今回から主人公の気持ちを括弧で括って書いてみましたがどうでしょう？
w w w w w w

積み込みの日

「ああああいらつくなああああ！」

俺は朝から不機嫌である。理由は隣りがうるさくて寝れなかったのだ。

「イライラが溜まった時はモーニングコーヒーが一番ですよっと」

俺はインスタントのコーヒーを作る。ボロボロの家だが、水道もある。なんて優良物件…デジャヴか、すまない。

「美味だな…。」

一杯10数円のコーヒーを味わった後、制服に着替え俺は学校へ向かう。

大した事も起こらず、授業は終わり、俺は今日も山さんの所へ稼ぎにいくと、鞆に荷物をつめ、廊下に出ようとすると向かい側から入ってきた人にぶつかり、俺は尻餅をつき、鞆の中身は散乱した。

「わるかったな。」

俺はそう言い、中身を拾い集める。

「いや…こつちこそ悪かった。手伝…！？おまえ！俊か！？」

「勝也か…」

俊は嬉しいのか驚いてるのかわからない表情をしていた。

「おまえこの高校だったのかよ！？半年前はったり連絡が取れなくなつて、一体どうしてるのかって心配だったんぞ！連絡くらいしろよ！」

「ああ…すまない…」

「お袋さんが亡くなつてどこで暮らしてるんだ！？生活費とか大丈夫なのか！？」

うつとうしい…

「なんとかやってる。なあ、俺に構わないでくれないか？」

「なんでだよ！？俊！あの事引きずってんのか！？あんなの誰も気にしてねえぞ！」

勝也は声を荒げ怒った。

「…またな。」

俺はそう言っ て学校を出た。

「さてよ！」と勝也の呼ぶ声が聞こえるが、待て、と呼ばれて待ったらこの世の中どれだけ平和な事なのだろう、と思いながら俺は家に帰り着替えをして、また『一発』に向かった。

「ういす」

俺はいつものように山さんに挨拶をする。

「俊坊…またきたのか。生憎だが今日は先客がいてな。ほら、奥のいつもの卓だよ。」

「先客？珍しいな、こんな時間に。」

すると山さんは、カウンターから身を乗り出し、俺の耳元でこう囁く。

「中々のやり手だ。俊坊と、同じ、いやその上かもしれないぞ。」

「は、なるほどね。じゃ、ちよっくら見に行ってくるわ。」

そう言っ て俺は奥に向かう。こんな時間に雀荘にくるのは俺かヤクザ連中しかいないし、俺より上という山さんの言葉が気になった。

（あそこにいるのは…昨日フルボッコにしたゴルゴ風の男と昨日と違っ、いかちい男二人……！？あれは！？）

なんと、そこには、高校生くらいの年齢の可愛い女の子がいたのだ！

「おいおい、やるやるとは聞いてたが、女の子囲むってお前そりやねえよ…」

俺はゴルゴに言う。

するとゴルゴは、俯き、そして、笑い出した…。

「くくく、坊主、俺の点棒数えてみるよ。」

俺は言われるがままに、ゴルゴの点棒を数える。

「…まさか！」

俺は周りのいかちい男二人の点棒も数える。

「この女の子に、俺ら鴨られてんのさ。」

ゴルゴは笑いながら牌を切る。すると女の子は明るく言った

「あ、それ、ロンですっ」

ゴルゴは、笑いながら女の子に言う。

「おいおい、待てよ。この《西》はもう三枚切れ……！二枚しか場に出てない…くッ！ミスっちゃったぜ！」

その時俺は確信していた。

（この女の子…すり替えたか…）

「次だ次！」ゴルゴは苛立ちながら、牌を混ぜる。

（なんかあるな…）

俺はそう思い、女の子の動きに注目した。その女の子は素人とは到底思えない速さで牌を積んでいく。

（おいおい、まさか元緑じゃないだろうな…）

そして三巡目…

「ラッキーですう ♪ ほら大三元ツモりましたあ ♪」

「なあ！」ゴルゴは驚いて啜えていた煙草を落とした。

（本当に元緑積みやがった…。でもただのサマ師になら…山さんは俺より上とは言わないだろう。…やってみるか。）

「おじさん、ちょっと代わってくんね？」

俺はいかちい男に頼む。

「別にいいが…。」

その男はチラッとゴルゴを見る。

「構わん、この嬢ちゃんにも坊主にも通し（ローズ）は通用しない。ヒラで打つ。」とゴルゴは牌を混ぜる。

「よろしく。」俺は女の子に一言かける。まあ社交辞令ってやつだ。

「よろしくね♪クールボーイ♪」女の子はケラケラと笑い牌を混ぜる。

（こんな奴には負けねえ…）

牌を混ぜる時点でもう既に戦いは始まっている。いかに、積みやすい牌を自分の近くに持ってくるか。俺は3、5、7の数字の牌を固める事で、意図的にトイツ場を作っている。そして気になる女の子の手元を見る。

（東に白に中に發か…爆弾だな。なら…）

俺はわざと牌同士をぶつけ、中と發を対面のゴルゴ側に寄せた。

（これで安心つと。）

「むーなかなかやるですねー」

女の子はジト目でこちらを見てるが俺は気にしない。何が起きてる

かわかっていないゴルゴも気にしない。そして四人とも積み終える。

「さて……俺のターーン!!」ゴルゴは叫ぶ。

(いや、ただサイコロふるだけなんだけどな…。)

「5だと。俺のどこだな」

配牌を終える。まずまずの配牌だ。

(これなら勝てる…)

そして15巡目

「ツモったあゝ字一色で役満だよ」女の子は嬉しそうに言う。

「「「な!」「」俺ら野郎三人はハモって驚く!

(爆弾は消したはず…なのになんで…)
俺は混乱している。

「爪が甘いぞゝクールボーイ」

ムカつく…可愛い声で言われるとなおムカつく…

「ちつ…ありがとうございます。役満負けた分はここに置いときます。」

と言って俺は席を立つ。

「あたしも、そろそろ帰りたいですう。精算しましょ。」と女の子は髪の毛をいじりながら言う。

「このまま続けても鴨られるだけだからな…麻雀やめどきかね、これは。ほら、負け分だ。」

と言ってゴルゴは悲しそうに財布から諭吉を出す。

「ありがとうございますう。でわ、またいつか会ったらよろしくです。ダンディなオジ様にクールボーイ。場代は払っておきますね。」
と言って女の子も席を立ち山さんに場代を払い店から出て行く。

（ローズして負けるんだから、お前相当才能ないよ…）

と俺は同情しながら山さんの所へ向かう。

「よお、あの嬢ちゃんが払ってったってことは俊坊は負けたんだな？」

山さんは笑いながら話し掛けてきた。

「一体あの子は？」俺は山さんに尋ねる。

「いやあそれがわからんのだ。今日フラッときて、賭場はどこかって聞いてきてな。冗談かと思ったんだが、あの慣れた手つきを見たら、な。」と言ってニヤツと笑う。

「世の中は広いぞ、俊坊。」

「ふん。じゃあ帰るわ。また。」

「気をつけて帰れよ。」

「わかってるよ。」

そう言って俺は《一発》を後にした。

ストーリーカーの代償はあまりにも重すぎて…（前書き）

いいペースで書けてる…かな？

なにか誤字脱字等修正点があれば、教えていただければ幸いです。

ストーカーの代償はあまりにも重すぎて…

（女の子に負けるなんて…）

商店街を歩きながら、俺は今日の自分の行動を反省していた。

（何がいけなかったのかわからない…。俺は最善を尽したはずだ…
なのになぜ…。）

と、悩みながら商店街の大通りを歩いていると前の方に《一発》で
会った女の子がいた。

（直接聞いた方が…はやいか。）

俺はその女の子の方へ歩き出す。

しばらく追いかけていると、女の子はスーパーに入った。（スーパ
ー…意外と家庭的なんだな…。）

俺は驚きながらもスーパーへ入っていく。

その女の子はしばらく店内は歩き回った後、カップラーメンコーナ
ーで立ち止まっていた。

（ん…カップラーメンか…）

少女は特売ワゴンの中に入っている新商品の『青のきつね』と『黄

色のたぬき』を両手にもって悩んでいる。

（おいおい、人が食べられる色してねえじゃねえか、パッケージ的に考えて。）

少女は、決断したように、顔を上げ、『青のきつね』と『黄色のたぬき』を箱買いした。

（大人買いだな…。）

その女の子は会計を終えると、前に箱を二つ抱えているせいか、おぼつかない足取りで店を出た。

（手伝って…やるか。）

「なあ」

俺は女の子に後ろから声をかけたが、女の子はどこから声がしたのかわからなかったのか、キョロキョロと辺りを見回している。俺はわかるように横に立って言ってやった。

「箱で前が見えないだろ。貸せよ。一つ持ってやる。」

すると彼女は安堵した表情で

「おお、クールボーイ♪手伝ってくれるのか♪優しいねえ♪じゃあ、よろしくね♪」

と言って俺に二つ箱を預けてくる。

「俺、一つって言ったよな？」

「あなたはこんなか弱い乙女が重たい荷物持って手が腫れあがっても平気なの！？」

「…帰る。」

「いいのかなあ？あたしに聞きたい事があるんじゃないのかなあ？？もしかしたらもう二度と会えないかも知れないのに、こんなチヤンス逃しちゃっていいのかなあ？？」

（この女…なんでわかる…）

だが、今の俺には選択の余地はなかった。どうして負けたのか、わからない限り、数日は眠れない夜を過ごしそうだからだ。

「ちつ。」肯定的意味の舌打ちである。

「てなわけであたしの家までよろしくう」

「時に落ち着け。ここは誰の家だ？」

「ん？あたしの家だよ？」

「そんな珍回答はいい。ここは誰の家だ？」

「だあかあら！」

と言って女の子は俺の部屋の隣りを指差す。

「あたしの家だって！」

（…なるほど。隣りの越してきたのはあの女だったってわけか。すげえ偶然だなあ。）

俺は女の子の部屋の玄関先に箱を積み重ねる。

（本題に移らなければつと。）

「さて…じゃあ教えてもらおうか」

「まあまあ、とりあえず、家に入ってお茶でも飲んでってよ」さあ
さあ」

「いや、すぐ終わるからこじでいい。」

「あたしの入れたお茶、飲んでくれないのね…。ぐす…」

（…嘔泣きだな。めんどくさいけど、あがらないとますますめんどくさくなりそうだ…。）

「わかった。お茶、ご馳走になるよ。」

「やたゝでは、女の子の秘境へ、ご招待〜」
そう言つてその女の子はドアを開けた。

俺はリビング、ていっても一間なので、寝室兼リビングの部屋に通された。女の子がお茶を入れている間暇なので、色々と観察して見る。

部屋は至って普通。ボロアパートなので間取りは俺の家とまったく同じ。ただ違うのは、全く部屋の雰囲気合わない天蓋付きベットがある事と、玄関に、使い込まれたバットと、手入れの行き届いたグローブが置いてある事だ。

ちゃぶ台のような小さなテーブルの上に二つお茶の入った湯飲みが置かれる。

「粗茶ですが、どぞどぞー」

「…いただきます。」

「んと、あたしは園城 彩乃。キミは？」

「俺は黒羽 俊。」

「俊君ね、よろしく、んで、あたしに、どうして爆弾積み込み阻止したのに、役満出せたのか、聞きたいんでしょ？」

「…ああ。どうして、字一色なんて上がったんだ？少なくとも俺の積んだ列では字牌はほとんどツモれないはずだ、固めたんだから。となると字牌はお前の積んだ列でツモったはずだ。爆弾は崩したのになぜ？」

「あは、まんまと引つ掛かったねえ、あたし、爆弾じゃなくて元緑積もうと思ってたんだよ、しかし天和狙いの、だから《南》とか《西》も一緒に積んだの。」

「なるほど…。そこまで注意してなかった、俺もまだまだだな…。」

「まああたしと同じレベルになるまで後200年はかかるわね」

（へいへい、人間の寿命を軽く超えてますねたと。）

俺は場を繋ぐように、お茶を飲む。そして入った時から気になって
いた疑問をぶつける

「なあ、玄関にバットと、グローブ置いてあったが、お前、野球や
るのか？」

「……」

綾乃は俯いたままだった。

（なんか…まずいこと言ったかな…。）

「あの…」

すると、女の子はテーブルをバンツと手で叩き

「あたしには、園城 綾乃っていう名前があるの！『お前』じゃな
くて、名前で呼んでよね！」

「ああ、すまなかった。園城…さんは、野球やってたのか？」

「それはね♪秘密♪」

「…」

二人とも無言の時間が何分か経った。

（話すことも大してないし、お茶も飲みきった。そろそろ帰って寝たくなってきたな）

「んじゃ、俺帰るわ。」

「送ってこつか？荷物持ってくれたお礼として♪」

「なんで男が女に送ってもらわなきゃいけないんだよ。第一俺の家、隣り…」

（しまった…一番肝心な事言い忘れた…。）

「お隣りさんなんだ♪じゃあ長いつきあいになりそうだね♪」

「……。おやすみ。」

「おやすみなさういっ」

俺は園城の部屋を出て自分の部屋に入り、すぐに布団にくるまる。

こうして、長い一日は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0112e/>

Gradually

2010年10月9日05時59分発行